資料５－２

令和５年度全国学力・学習状況調査
ウェルビーイングに関する分析報告書

―　学校という「場」のウェルビーイングの醸成に向けて　―

実施：文部科学省
分析：京都大学人と社会の未来研究院
内田由紀子・奥田麻依子

1. 教育におけるウェルビーイングと分析の必要性

第 4 期教育振興基本計画（令和 5 年 6 月 16 日閣議決定）（以下「教育振興基本計画」という。）において、ウェルビーイングは「身体的・精神的・社会的に良い状態」として定義づけられ、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる 持続的な幸福を含む概念とされている。学校においては、子供だけではなく、教職員や地域社会を含む、多様な個人が、学校との関わりを通じて、それぞれに多様な幸せや生きがいを感じることができるような場づくりが求められている。

こうした意味ではウェルビーイングは子供のみならず広く教師、職員、地域社会に広がるものとして測定され得るべきものであると考えられ、この考え方に基づき令和 5 年度の中央教育審議会の議論においては、今後の学校・地域・社会の包括的ウェルビーイング（図 1）の測定を目標とすることの重要性にも触れられてきた。

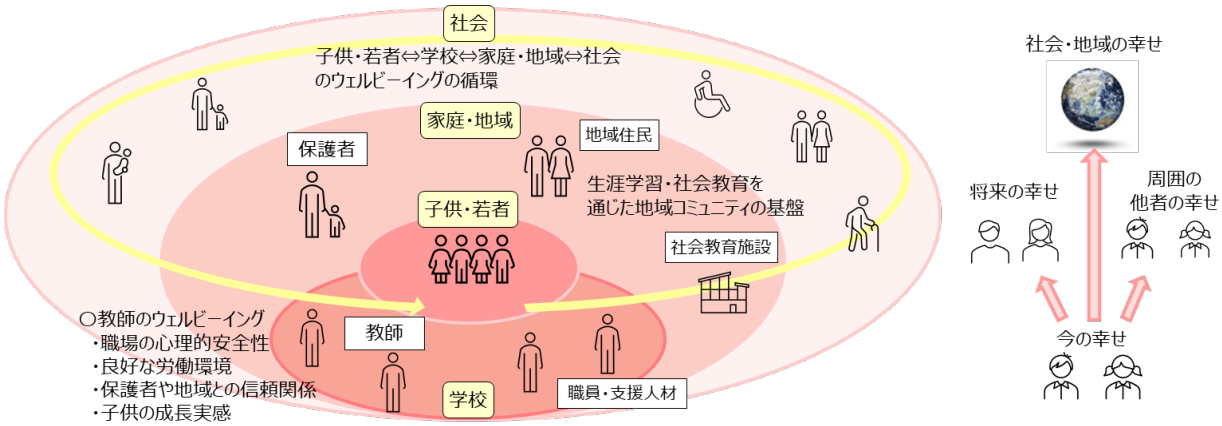

図 1. 教育振興基本計画における教師、学校、地域・社会の包括的ウェルビーイング

他方で、学校の中心にある子供たちのウェルビーイングの状態を理解し、今後の教育政策を進めていくことも極めて重要である。これまでの児童生徒を対象とした大規模な調査として、文部科学省が「全国学力・学習状況調査（以下「学力・学習状況調査」という。）」を実施してきており、国語や算数などの教科に関する調査とともに、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査が行われてきた。

令和 5 年度からは教育振興基本計画のウェルビーイングの議論を受けて、数項目のウェルビーイング関連項目が追加され、また、地域や社会に関わる活動の状況等、これまで別枠で扱われてきた質問項目についても、幸福感との関連を検討することで、包括的なウェルビーイングの指標としての活用が可能となった。そこで、本報告書においては、令和 5 年度の学力・学習状況調査のデータをもとに、小学生・中学生のウェルビーイングの状況について検討することを目的とする。

教育振興基本計画においては「教育に関連するウェルビーイングの要素」として、自己肯定感、心身の健康、幸福感 （現在と将来、 自分と周りの他者）、協働性、社会貢献意識、

学校や地域でのつながり、自己実現 （達成感、キャリア意識等）、安全・安心な環境、多様性への理解、利他性、サポートを受けられる環境を挙げている。そして「これらを、教育を通じて向上させていくことが重要であり、その結果として特に子供たちの主観的な認識が変化したかについてエビデンスを収集していくことが求められる」としている。

しかしながら、そもそも学力・学習状況調査における質問調査項目は、ウェルビーイングを測定する目的によって導入されているものばかりではない。こうした項目群をウェルビーイング関連項目として再定義したうえで分析する上では、必ずしも教育振興基本計画で定義しようとしていた一連のウェルビーイング関連概念を網羅的に測定するものではないことには注意が必要であり、今後ウェルビーイングを網羅的に捉える項目整備も必要と考えられる。その点を前提とした上で、令和５年度調査においては「幸福感」、「学校や地域でのつながり」、「協働性」、「利他性」、「多様性への理解」、「サポートを受けられる環境」、「社会貢献意識」、「自己肯定感」、「自己実現（達成感、キャリア意識など）」、「心身の健康」の概念に関連する項目について検討を行う。

2. 調査概要（目的、分析項目、分析対象者数等）

2-1. 目的

児童生徒の学校や家での生活に関する意識や行動が、主観的幸福感とどのように関わっているのかを検討し、今後の施策の参考とすることを目的とする。特に、教育振興基本計画で掲げられた日本社会に根差したウェルビーイングに関連する要素である、「学校や地域でのつながり」、「協働性」、「利他性」、「多様性への理解」、「サポートを受けられる環境」、「社会貢献意識」、「自己肯定感」、「自己実現（達成感、キャリア意識など）」、「心身の健康」 に関連する項目について重点的に検討を行う。

2-2. 分析対象者数

児童質問紙調査（小学生）：小学校第６学年を対象に実施された児童質問紙調査に回答のあった 992,542 名のうち、矛盾する回答[1]、「該当する活動を行っていない」という回答[2]、無回答・その他を含む回答がない児童 933,693 名を対象に分析を行った。

---

[1] 矛盾する回答：児童生徒質問紙 Q16「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（学校の授業の予習や復習を含む）」で「よくしている」「ときどきしている」と回答しているにもかかわらず、Q17「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」、Q18「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の両方で「全くしない」と回答している場合に、矛盾する回答とみなし、分析対象から除外した。

[2] 「該当する活動を行っていない」という回答：児童質問紙 Q32・生徒質問紙 Q36「５年生まで〔１、２年生のとき〕に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」で「考えを発表する機会はなかった」と回答、児童質問紙 Q36・生徒質問紙 Q40「学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」で「学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を行っていない」と回答した場合に、分析対象から除外した。

生徒質問紙調査（中学生）：中学校第 3 学年を対象に実施された生徒質問紙調査に回答のあった 926,095 名のうち、矛盾する回答[1]、「該当する活動を行っていない」という回答[2]、無回答・その他を含む回答がない生徒 831,566 名を対象に分析を行った。

2-3. 分析項目

令和 5 年度調査の表 1 の項目を分析対象とした。

なお、質問紙、ならびにそれぞれの回答の分布などの記述統計の情報は、国立教育政策研究所ウェブサイトの「全国学力・学習状況調査」内の「令和 5 年度報告書・調査結果資料」に掲載されているのであわせて参照されたい。

・質問紙調査 https://www.nier.go.jp/23chousa/23chousa.htm

・回答結果等 https://www.nier.go.jp/23chousakekkahoukoku/index.html

表 1. 本報告書における分析で使用した質問項目

「令和 5 年度全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査」区分		質問番号	
1	基本的生活習慣等	小学生	1～3
		中学生	1～3
2	挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等	小学生	4～15
		中学生	4～15
3	学習習慣、学習環境等	小学生	22
		中学生	22
4	地域や社会に関わる活動の状況等	小学生	25～28
		中学生	29～32
5	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況	小学生	36
		中学生	40
6	総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科 道徳	小学生	40
		中学生	44
7	学習に対する興味・関心や授業の理解度等（国語）	小学生	43～46
		中学生	47～50
8	学習に対する興味・関心や授業の理解度等（算数・数学）	小学生	51～54
		中学生	55～58
9	学習に対する興味・関心や授業の理解度等（英語）	小学生	55～56
		中学生	59～62
10	学力調査 平均正答率	小学生	国語・算数
		中学生	国語・数学・英語
11	学校基本情報：地域規模、学級数規模	-	-

これらの項目を、日本社会に根差したウェルビーイングの要素に基づき、表 2 のように整理した [3]。たとえば、主観的幸福感については、児童生徒質問紙「学校に行くのは楽しいと思いますか（Q12）」、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか（Q15）」の 2 項目の得点の平均値を分析に用いた。

質問紙においては、基本的に 1 が「当てはまる」「している」、4 が「当てはまらない」「全くしていない」の方向性となっていたが、本報告においては、分析に際して、配点を逆転させ、当てはまる方向が 4 点になるように修正している。各調査項目の選択肢に応じて、たとえば「当てはまる」を 4 点、「どちらかといえば、当てはまる」を 3 点、「どちらかといえば、当てはまらない」を 2 点、「当てはまらない」を 1 点とする処理を行ってから分析を実施した。つまり、以下いずれの項目においても、数値が高くなるほど概念への当てはまりが高くなっていることに留意されたい。

表 2. 本報告書で用いる変数

教育振興基本計画での記載	本報告書での記載	質問項目	項目間相関	
			小学生	中学生
幸福感	主観的幸福感	学校に行くのは楽しいと思いますか	0.367	0.421
		普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか		
学校や地域でのつながり	友達関係	友達関係に満足していますか	-	-
	地域のつながり	今住んでいる地域の行事に参加していますか	-	-
協働性	協働性	学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか	0.357	0.405
		あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか		
利他性	利他性	人が困っているときは、進んで助けていますか	0.363	0.381
		人の役に立つ人間になりたいと思いますか		
多様性への理解	多様性	自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか	-	-

[3] 2～3 項目をまとめた変数については、項目間の相関係数により一定以上の正の相関（一方が増えると、他方も増える関係）が見られることを確認し、8 項目をまとめた「教科への態度」については、α 係数により、十分な一貫性を有していることを確認した。なお、本報告書において、児童質問紙調査の回答者を「小学生」、生徒質問紙調査の回答者を「中学生」と記載する。

教育振興基本計画での記載	本報告書での記載	質問項目	項目間相関	
			小学生	中学生
多様性への理解	外国への関心	外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いますか	0.545	0.549
		日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか		
サポートを受けられる環境	教師サポート	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか	0.244～0.425	0.313～0.422
		先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか		
		困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか		
社会貢献意識	社会貢献意識	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか	-	-
自己肯定感	自己肯定感	自分には、よいところがあると思いますか	-	-
自己実現	自己実現	将来の夢や目標を持っていますか	-	-
心身の健康	健康	毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか	0.463	0.475
		毎日、同じくらいの時刻に起きていますか		
学力	教科への態度	国語の勉強は好きですか	0.79（※）	0.81（※）
		国語の勉強は大切だと思いますか		
		国語の授業の内容はよく分かりますか		
		国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか		
		算数〔数学〕の勉強は好きですか		
		算数〔数学〕の勉強は大切だと思いますか		
		算数〔数学〕の授業の内容はよく分かりますか		
		算数〔数学〕の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか		
		英語の勉強は好きですか		
		英語の勉強は大切だと思いますか		
		英語の授業の内容はよく分かりますか	小学生は項目なし	
		英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか		

教育振興基本計画での記載	本報告書での記載	質問項目	項目間相関	
			小学生	中学生
学力	成績	学力調査における国語正答率、算数（数学）正答率、英語正答率（中学生のみ）の平均値	-	-
家庭環境	社会経済的背景	あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか（一般の雑誌、新聞、教科書は除く）	-	-
その他関連要因	地域規模	学校基本情報_地域規模	-	-
	学校規模	学校基本情報_学級数規模	-	-

（※）項目間相関は同じカテゴリ内の項目間の相関係数。全て 0.1%水準で有意。教科への態度のみ、項目数が多いため、相関係数ではなく α 係数を記載。

3. 主観的幸福を支える要因

3-1. 主観的幸福感

まず、主観的幸福感の状態を把握するため、児童質問紙調査（小学生）・生徒質問紙調査（中学生）それぞれについて集計を行った結果を表 3 に示した。全体として、4 点満点中 3 以上が平均となっており、本調査に回答した児童生徒の主観的幸福感は高い状態であったといえる[4]。

表 3. 学年別の主観的幸福感

調査項目	小学生(N=985360)		中学生(N=912649)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
学校に行くのは楽しいと思いますか	3.31	0.83	3.21	0.86
普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか	3.40	0.68	3.28	0.71
主観的幸福感得点（2 項目の平均値）	3.35	0.63	3.24	0.66

[4] この結果のみ、矛盾する回答と本項目の無回答・その他の回答がない児童生徒を対象に分析。

3-2. ウェルビーイング関連項目

表 2 で整理した各変数に関する得点を算出した結果、表 4 の結果が得られた[5]。「地域のつながり」等やや低い項目もあるが、おおむね肯定的な評価となっていることが伺われる。

表 4. ウェルビーイングに関連する変数の平均値と標準偏差

変数	小学生 (n=933693)		中学生 (n=831566)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
主観的幸福感	3.37	0.61	3.26	0.65
友達関係	3.53	0.72	3.44	0.73
地域のつながり	2.65	1.04	2.16	1.03
協働性	3.14	0.66	3.10	0.66
利他性	3.55	0.50	3.48	0.53
多様性	3.06	0.83	3.09	0.79
外国への関心	3.12	0.83	2.85	0.88
教師サポート	3.29	0.58	3.16	0.61
社会貢献意識	3.07	0.84	2.75	0.89
自己肯定感	3.23	0.82	3.14	0.84
自己実現	3.36	0.95	2.95	1.05
健康	3.31	0.63	3.28	0.64
教科への態度	3.32	0.47	3.11	0.50
成績（学力調査の平均正答率）	65.62	20.19	56.93	21.32
社会経済的背景	3.10	1.31	3.05	1.34
地域規模	2.71	0.96	2.69	0.95
学校規模	3.42	1.13	5.19	1.82

主観的幸福感を従属変数、表 5 に示したその他の関連変数を独立変数とする重回帰分析を小学校、中学校のそれぞれについて行った。小学校、中学校のどちらともに共通して**「友達関係」**が最も高い関係を持っており、次いで高い関連を持つ変数は**「教師サポート」**であった。「自己肯定感」についても高い関連が見られた。少なくとも学力・学習状況調査に回答している児童生徒においては、周囲の友達や教師との関係性が主観的幸福感を支えていることが伺われる。「教師サポート」には、「先生は、あなたのよいところを認めてくれている

[5] 成績（学力調査の平均正答率）は 1～100 の範囲、社会経済的背景は、0～10 冊を 1、11～25 冊を 2、26～100 冊を 3、101～200 冊を 4、201～500 冊を 5、501 冊以上を 6 として得点化、地域規模は大都市を 4、中核市を 3、その他の市を 2、町村を 1 とし、学校規模は学級規模を小学校は 6 段階、中学校は 9 段階の区分を小さい方から 1 点として得点化。

と思いますか」、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の項目が含まれ、学習だけでなく生活も含めた、多様な場面での教師等のサポートが関連していると考えられる。

また、小学生においては、「教科への態度」も主観的幸福感と高い関連が見られ、各教科について、授業の内容が理解でき、好きだと感じている、あるいはそれらが大切であり、将来の役に立つと感じていることが、主観的幸福感にとって重要であることが伺われた[6]。他方で「成績」や「社会経済的背景」は主観的幸福観とは（回答者数が多いため統計的には有意ではあるが）ほとんど関連していないことが示された。

表 5. 主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析

	小学生	中学生
	β	β
切片	-0.098	-0.041
友達関係	**0.247**	**0.284**
地域のつながり	0.020	0.022
協働性	0.050	0.082
利他性	0.049	0.074
多様性	0.092	0.083
外国への関心	0.020	0.020
教師サポート	**0.183**	**0.173**
社会貢献意識	0.005	0.010
自己肯定感	**0.136**	**0.170**
自己実現	0.025	0.019
健康	0.043	0.041
教科への態度	**0.159**	0.078
成績	-0.021	-0.003
社会経済的背景	-0.029	-0.029
地域規模	0.014	0.011
学校規模	0.004	0.012
性別（女性ダミー）	**0.196**	0.082
調整済み R^2	0.411	0.434

すべて：$p<0.001$

[6] 複数項目構成した変数ではなく、各変数から 1 項目（主観的幸福感と相関が高い項目）を選んで同様に重回帰分析を実施した場合にも関連が高い変数は大きく変わらなかったが、「教師サポート」は 1 項目（先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか）にすると β が小さくなった（小学生：β=0.113, 中学生：β=0.109）。

高い関連が見られた変数について、共分散構造分析を行った結果、図 2 に示した結果が得られた[7]。多様な教師のサポートは自己肯定感とも関連し、周囲の友達や教師との関係性と合わせて主観的幸福感につながる可能性が示唆された。

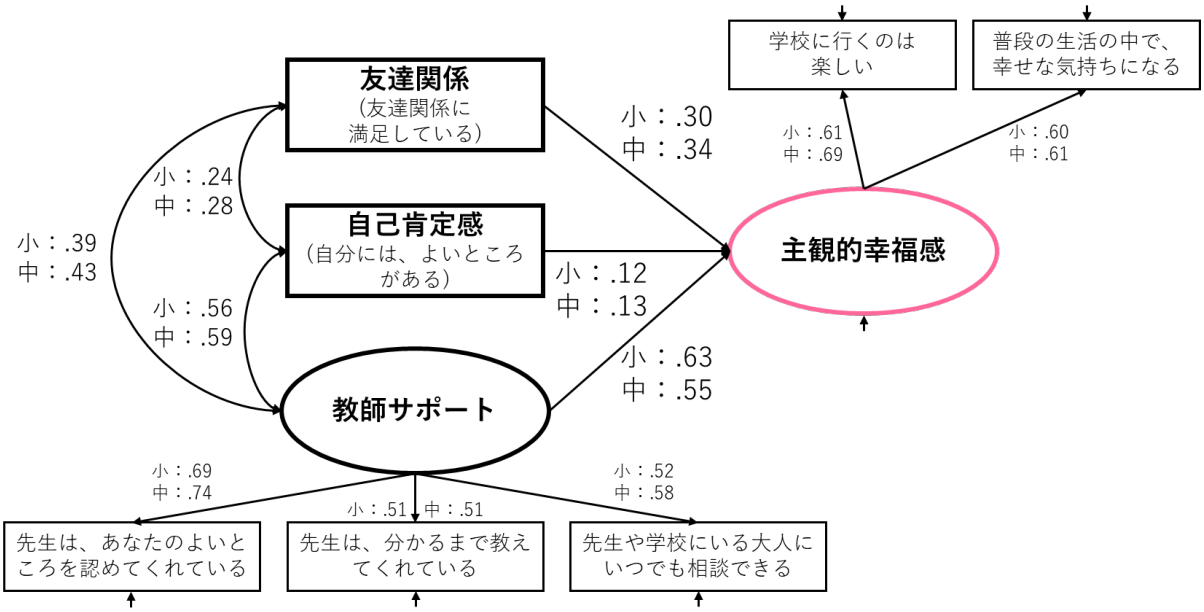

図 2. 共分散構造分析の結果

小は小学生、中は中学生の標準化係数（片方矢印）および相関係数（両矢印）であり、すべて 0.1%水準で有意。数字なしの片方矢印は誤差変数の設定。

4. ウェルビーイングと学力の関係

経済協力開発機構（OECD）が世界各国の義務教育修了段階の 15 歳の生徒を対象として実施する生徒の学習到達度調査（PISA）では、2015 年の調査からウェルビーイング関連の項目が特に分析されるようになり、日本は科学的リテラシーの得点は OECD 平均を上回るが、生徒の生活満足度[8]は OECD 平均を下回ることが指摘された。一方で、この測定項目自体が欧米的な価値観に偏っていることも指摘されている（Rappleye et al., 2019）。PISA2022 では、ウェルビーイングの一側面を測定する指標として「学校への所属感」が特に注目され、日本はこの値は 2018 年から 2022 年にかけて、向上していた。

第 4 期教育振興基本計画で「ウェルビーイングと学力は対立的に捉えるのではなく、個人のウェルビーイングを支える要素として学力や学習環境、家庭環境、地域とのつながりなどがあり、それらの環境整備のための施策を講じていくという視点が重要である」と示された

[7] 小学生のモデルの適合度は GFI=.977, AGFI=.935, CFI=.933, RMSEA=.092, 中学生のモデルの適合度は GFI=.980, AGFI=.944, CFI= .953, RMSEA=.085 であり、一定の水準を満たしていると言える。

[8] 「全体として、あなたはあなたの最近の生活全般に、どのくらい満足していますか」という質問に対する 0（全く満足していない）～10（十分に満足している）までの 11 段階での回答。

が、ウェルビーイングと学力（本調査では「教科への態度」と「成績」）の関係はどう捉えられるだろうか。

前項で示したように小学生においては、「教科への態度」が主観的幸福感と高い関連が見られたことから、「教科への態度」および「成績」と他の変数の関係を分析した。その結果、表 6 に示したように、多くの変数との正の相関が示された。特に、「協働性」は小学生、中学生とも中程度の相関があり、話し合い等を通して、自身の考えを深めたり、広げたりすることの重要性が伺われた。また、「教師サポート」とも正の相関があり、教師が分かるまで教えてくれる等のサポートがあることが、教科への肯定的な態度につながることが示唆される。

表 6. 学力とウェルビーイング関連変数との相関

	小学生				中学生			
	教科への態度		成績		教科への態度		成績	
主観的幸福感	**0.427**	***	0.097	***	0.354	***	0.080	***
友達関係	0.207	***	-0.002	*	0.192	***	-0.014	***
地域のつながり	0.189	***	0.040	***	0.172	***	0.017	***
協働性	**0.441**	***	0.176	***	**0.408**	***	0.173	***
利他性	0.389	***	0.064	***	0.322	***	0.022	***
多様性	**0.454**	***	0.145	***	0.375	***	0.153	***
外国への関心	**0.462**	***	0.069	***	0.399	***	0.111	***
教師サポート	0.399	***	0.076	***	0.389	***	0.060	***
社会貢献意識	**0.417**	***	0.118	***	0.352	***	0.081	***
自己肯定感	0.319	***	0.127	***	0.256	***	0.087	***
自己実現	0.203	***	-0.004	***	0.201	***	-0.007	***
健康	0.288	***	0.145	***	0.198	***	0.051	***
教科への態度	-		0.324	***	-		0.373	***
成績	0.324	***	-		0.373	***	-	
社会経済的背景	0.157	***	0.269	***	0.109	***	0.239	***
地域規模	0.012	***	0.056	***	0.014	***	0.070	***
学校規模	-0.002	*	0.067	***	-0.017	***	0.053	***

*：$p<0.05$,***：$p<0.001$

5. まとめにかえて

本報告、いくつかの重要な視点を提供している。

1．以前に国際的な調査などで指摘された日本の子供たちに関するウェルビーイングの傾向と異なり、学力・学習状況調査によると、日本の児童生徒の主観的幸福感（「学校が楽

しい」など）は全体としては低い値ではないこと。ただし、学力・学習状況調査は一斉に行われていること、悉皆調査だが全ての児童生徒が回答しているわけではないことには留意が必要である。

2．学校という場所においては、学力（成績）そのものよりもむしろ、友達との関係、教師との関係など、他者とのつながりの方が児童生徒の主観的幸福感を向上する上で重要な役割を果たしていること。そして、主観的幸福感は、教科へのポジティブな態度にも繋がっている。こうしたことから、学校という場の状態を良いものにしていくことは重要な課題である。

3．そのためにも、教師のウェルビーイングが重要であることを指摘したい。児童生徒のウェルビーイングには教師からのサポートが寄与していたが、教師の側に心や時間の余裕がなければ、生徒たちに向き合ってサポートを提供することが難しくなるだろう。サポートの提供者である教師にもまた、サポートが必要である。それは学校内の体制の整備や、学校の業務の中でも必ずしも教師が担う必要のない業務を地域で支援することなども考えられるだろう。これまで、学力・学習状況調査では、教師のウェルビーイングを直接的に測定できていないが、今後はこうした観点からも検討が必要である。